

広告

企画・制作＝日本経済新聞社
クロスメディア営業局

小説に描かれた日本流の深い人間関係に共感

日本輸送機（ニチュ）・二ノ宮秀明社長に聞く「居眠り磐音（いわね）江戸双紙」の魅力とは――



日本輸送機（ニチュ）社長

二ノ宮秀明（にのみや・ひであき）氏

東京都出身。一橋大学社会学部卒業後、1974年三菱重工業入社。2003年三菱キャピタリーフォークリフトアメリカ代表取締役、07年三菱重工業執行役員を経て、09年4月より日本輸送機に顧問として入社。同年6月専務、11年6月から現職。

異国アメリカの地で読んだ「居眠り磐音 江戸双紙」シリーズへの思いとは？ 海外経験の長い、日本輸送機（ニチュ）社長の二ノ宮秀明氏にお話を伺った。

アメリカの地で共感した
磐音の深い人間関係

仕事の関係で、随分長い間、アメリカで生活していました。都合15年ぐらいでしょうか。

やはり海外ですと、日本の新刊本はなかなか手に入りにくい。そこで、出張で日本に戻ってくるたびに、書店を訪れて大量購入するのが常でした。そんな時に出合ったのが、「居眠り磐音 江戸双紙」シリーズです。

池波正太郎や柴田錬三郎などを読んではいましたが、時代小説を意識して手に取ったことはありませんでした。はまりましたね（笑い）。以来、磐音シリーズだけでなく、佐伯泰英さんの別のシリーズや他の時代作家の本など、時代小説を手当たり次第に読むようになりました。

アメリカでは、生活スタイルが日本とまったく違うんです。日本だと、時代小説の中にも出てくるような、長屋の隣同士といった距離感で人付き合いをする。周囲に気を使いながら生活します。ところがアメリカでは、人間関係はドライ。他人を気使う前に、自分を主張しなければならず常に緊張感があります。

グローバル社会の中では、日本のスタイルが必ずしも是ではありませんが、かといってアメリカのスタイルは、日本人にとってストレスが多い。ストレスをリリース

（発散）しないとやっていけません。そこで磐音の出番です。おこんさんとの夫婦関係、下町の人たちとの交流……ここには、深い人間関係が描かれています。日本社会でも、これほど深い人間関係は築けないかもしれませんが、だからこそ憧れるし、共感もする。読んでいて安定した人間関係にほっとするんですね。

正道を行く磐音の姿は
人の生き方に通ず

作者の佐伯さんは、以前、映像関係のお仕事もされていたと何かのインタビューで読みました。だからでしょうか、磐音シリーズは、映像的な文章が非常に多く、それも魅力の一つです。

磐音のかつての許婚（いなすけ）で、吉原の花魁（おいらん）になっていた白鶴太夫（奈緒）が、船で紅葉狩りをするシーンがあるんです（11巻「無月ノ橋」）。篝火（かがりび）に浮かび上がった紅葉、その中を船で進む、匂い立つ美しさの白鶴太夫。一転して河原での磐音の決闘シーンに移っていくんですが、最初に読んだとき、「これは映画だ！」と思いましたね。鮮やかな色彩が、パツと頭の中に浮かびました。磐音と白鶴太夫の恋は、シリーズ前半の読みどころの一つです。

しかし磐音は、なぜこうもモテるのか（笑い）。決して姑息（こそく）なまねをせず、正道を歩いているからでしょうか？ ビジネスもそうです。安易な金もうけは、やがて破綻を招きます。磐音のように、遠回りをいとわず真つすぐ進む。人も会社も、基本は同じなのかもしれません。

企業人に聞く！
時代小説
インタビュー



最新刊
第39巻
発売中

「居眠り磐音 江戸双紙」

佐伯泰英 著 双葉社刊 定価 680円（税込）
<http://inemuriiwane.jp/>

春風のように穏やかで思いやりの深い青年武士、坂崎磐音（いわね）を主人公とする書き下ろし長編時代小説。わけあって自藩を離れ、江戸・深川で暮らす磐音は、両替商・今津屋吉右衛門や剣の師・佐々木玲圓らとさまざまな出会いを経て、人として成長していくが、田沼意次一派により、大きな戦いへと巻き込まれていく――。